

## ◎特集 グローバルヒストリーと中世ヨーロッパ（1）イギリスの視点◎

### 序

小澤 実

グローバルヒストリーが近年注目を浴びていることは言を俟たない。グローバルヒストリーの定義が百家争鳴であることも周知の事実であるが、かりに水島司『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社、二〇一〇年）の例示にしたがうとすれば、次の五つの特徴を備えたものが「グローバルヒストリー」として分類されることになる。すなわち、①対象とする時間がロングスパンであること、②対象とするテーマや空間が広いこと、③ヨーロッパ世界の位置付けが相対化されていること、④諸地域間の相互連関を重視していること、⑤以上の条件を受けた上で歴史学にとって新規テーマ（疫病、環境、人口、生活水準など）を提案していること、である。

このようにナショナルな枠組みにとらわれず長期的かつ広域的な視点で論じる歴史学をグローバルヒストリーとす

るならば、その具体例はすでに無数にある。我が国においても、グローバルヒストリーを冠した単著や論集はいうまでもなく、「ミネルヴァ世界史叢書」（ミネルヴァ書房、二〇一六年―）や「シリーズ・グローバルヒストリー」（東京大学出版会、二〇一八年―）といった叢書すら組まれる段階にきている。グローバルヒストリーという用語もその用語が包摂する対象群も本邦のアカデミアにおいてすでに市民権を得たといつて良い。得たどころか、歴史学や歴史教育のあらゆる領域を侵食しつつあるとすら言えるのかもしれない。

しかしながら、私たちが無意識のうちに想定するグローバルヒストリーは、多くの場合、近代を対象としている。ヨーロッパと中国というユーラシア東西を起点とし、新大陸、アフリカ、南アジア、東南アジアといった固有の歴史

世界がネットワークで連接され連動して経済システムを構築する、いわゆる「世界の一体化」を契機としてグローバルな構造が生成したとする見方は、確かに正しくもある。このような構造に乗っかることによりポトシや石見の銀が世界経済の血流となることで、現代へといたるグローバル化は加速された。つまりグローバルヒストリーとは、一六世紀以降の世界を論じるための述語である、という理解は一定の説得力を持っている。そのような理解は、グローバルヒストリーの主流をなす潮流が、ウォーラスティンの『近代世界システム』ひいてはブローデルの『地中海』が内包していた地域間接続のアイディアに起源をさかのぼることからも裏書きされるかもしれない。

それでは一五世紀以前はグローバルヒストリーの対象ではないのだろうか。もちろん、我々の頭には、都市社会学者たるジャネット・アブー・ルゴドの『ヨーロッパ覇権以前』（原著一九八九年）が浮かび上がってくる。一三世紀におけるモンゴル帝国の台頭と一四世紀におけるこの広域支配国家によるユーラシア世界のネットワーキ化とシステム化を論じた本書は、近代世界システムを二世紀遡らせた画期的研究として、研究史上に確固たる位置を占めている。社会学者による本書が、佐藤次高、高山博、斯波義信、三浦徹という、いずれも近代歴史学の習い性であるナシヨナル

な枠組みにとられない専門を持つ第一級の研究者により翻訳されたことも示唆的である。モンゴル帝国が世界史の展開において重要な意味を持ちうることは、『ヨーロッパ覇権以前』の刊行に先んじてすでに日本の学界では周知の事実であったが、その事実が世界システム論と接合され英語で書かれることで、世界の学界においてより普遍性を持った議論として共有されることになった。

であるとすれば、中世にもまたグローバルヒストリーの対象として論じられる資格がある、かもしれない。しかしながら、中世と呼ばれる時代におけるヨーロッパ半島の歴史は、グローバルヒストリーの対象となりうるのだろうか。アブー・ルゴドの図式のなかでは、一三世紀のヨーロッパ——ここではキリスト教世界（Christianitas）と言い換えても良い——は、それ自身が固有のシステム性を持つサブシステムの一つではあるものの、必ずしもグローバル性を發揮する単位とはみなされていないように思われる。同じことは、いち早く前近代のグローバルヒストリー（に相当する研究）を提示したウイリアム・マクニールやマーシャル・ホジソンの著作においても当てはまる。中世ヨーロッパ世界は、アッバース朝、モンゴル帝国、ティムール帝国などとは異なり、前近代におけるグローバル化の動きの中で取り残された地域であると。それはナシヨナル

な枠組みに安住する欧州各国の国史研究や停滞と暗黒の中世という俗見とも相まって、中世ヨーロッパ研究にある種の枷をはめてきた。

実のところ、この数年急速に、とりわけ西欧やビザンツ帝国を舞台とした中世グローバルヒストリーとでもいえるべき研究や志向が、世界各地で確認できるようになっている。詳細は次号の拙論に譲るが、アメリカでも、イギリスでも、フランスでも、ドイツでも、オーストリアでも、独自の研究グループが立ち上がっている。それぞれのグループは、強力なリーダーシップを持った研究者と論集へと結実する研究集会を可能とする助成金を背景に、それぞれ独自の文脈を背景とするヒストリオグラフィを構築しながら、中世ヨーロッパの「グローバル化」を論じる潮流が生じている。

本号では、こうしたいくつもの中世グローバルヒストリーの流れのうち、イギリスでの展開に焦点を当てる。最初に、具体的な試みとして、キャサリン・ホームズ「グローバルな中世 問題とテーマ」、マレク・ヤンコヴィアク「奴隷のためのデイルハム 九・一〇世紀のイスラーム世界と北ヨーロッパ間の奴隷交易」、チャールズ・バーネット「十二世紀ルネサンス」という三本の論考を訳出する。オックスフォード大学のホームズ博士は、オックスフォード

大学を中心に活動を続けるプロジェクト「グローバルな中世」(The Global Middle Ages)のリーダーの一人である。

二〇一六年七月に立教大学で報告された本稿では、ヨーロッパに限定されることなく中世世界をグローバルヒストリーの中に落としこむための方法論とその検証過程が論じられる。極めて射程の広い講演内容であり、ここで開陳された議論を軸として論集『グローバルな中世』が二〇一八年末に刊行された。多言語を我がものとするオックスフォード大学のヤンコヴィアク博士は、パリ大学において初期ビザンツの神学論争の分析で博士号を取得したのち、オックスフォード大学のリュック・トレッドウェル博士率いるプロジェクト「奴隷のためのデイルハム」で研究員をつとめた。ピレンヌ・テーゼを批判したスウェーデンの古銭学者スチュレー・ボリーン以来の、西欧、スカンディナヴィア、ロシア、中東欧、イスラームをつなぐデイルハム(イスラーム銀)の歴史的意義を、システムとしての奴隷交易を通じて問う意欲作である。ロンドン大学付属ウオーバーク研究所のバーネット博士は、必ずしもグローバルヒストリーを前面に出す研究者ではないが、ラテン世界とイスラーム世界におけるテクストや思想の交換を専門とするがゆえに、その研究成果は必然的にグローバルな動きを内包する。とりわけ本稿は、グローバルな構造の中で論じられて

序（小澤）

しかるべき（だがなぜか西欧の受容のみばかりが強調される）十二世紀ルネサンスのあり方を概観した最新かつ先鋭的な論考であり、ウオーバーク研究所というイギリスが誇る学際的かつ越境的研究機関の潜在力が遺憾無く發揮されている。ホームズ博士の論考が方法論を提示する総論であるとするれば、ヤンコヴィアク博士とバーネット博士の論考は具体性をともなった各論という扱いになるだろうか。

以上の論考を受けて、日本人から見たイギリスの中世グローバルヒストリーのあり方を検証するために、小澤実「グローバルな中世」から「中世のゾミア」へ オックスフォードの中世グローバルヒストリー」ならびに川戸貴史「海のゾミアとして倭寇をみる」を掲載する。すでに述べたように中世グローバルヒストリーといってもそれを標榜する個人やグループ全体が一枚岩ではない。アブー・イルゴドの著作を一つの里程標とするといった共通要素もあるが、多くはその国独自の文脈がビルトインされたヒストリオグラフィの中で生じたプロジェクトである。小澤は科研費国際共同研究による一年間にわたるオックスフォード大学グローバルヒストリー研究所への滞在を、日本中世史家の川戸はオックスフォードと日本側の共催による「中世のゾミア」ワークショップへの参加に対する所感を認める。

本特集は、日本学術振興会科研費基盤研究A「前近代海域ヨーロッパ史の構築・河川・島嶼・海域ネットワークと政治権力の生成と展開」（課題番号：19H00546・代表：小澤実）の成果の一部である。

（本学文学部教授）